

2015年11月17日



第64号

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

百姓百生

その58

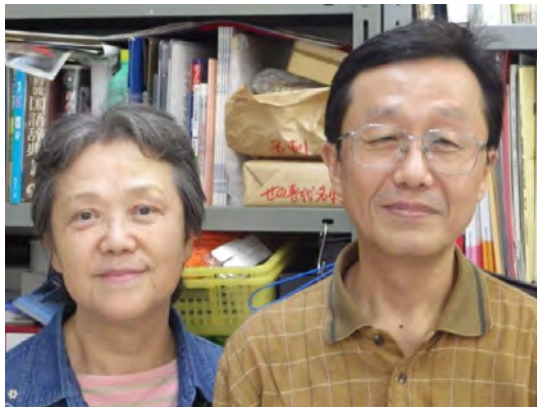
荒川住民ひろば

吉沢公良さん 千枝子さん

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

「どこか静かに話を聞ける場所がありますか」

と尋ねた。案内されたのは日暮里駅にっぽりから歩いて4・5分の「荒川住民ひろば」の事務所。小さなビルの1階、応援する区議さんとの共同使用だそう。入り口横には三里塚ワンパック野菜の空コンテナが14～5個積み上げられていた。「ワンパックの共同購入も35年をこえました」という。今、ワンパック野菜の配送は段ボール箱での戸配が中心で、コンテナ利用の拠点配送は希少になっている。それも1、2個というところがほとんどで、10個をこえる共同購入は今やここだけらしい。暮らしと活動のネットワークが生きている、そんな印象を持った。



公良さんは組合運動をしながら40近くの仕事をした。いちばん長かったのは金属加工のメーカー。今は「ワーカーズコレクティブひぐらし」というところで老人ホームの給食サービスをしている。千枝子さんは区の職員を48年務め、来年定年を迎える。

吉沢さんたちの成田空港闘争とのかかわりは長い。公良さんは1969年にデモにはじめて参加、芝山町しばやまの団結小屋から中央大三闘委のメンバーとして代執行闘争を闘った(71年)。その後成田市木の根きのねの三里塚闘争を支援する労働者の会(略称：三支労さんしろう)の団結小屋に常駐し、開港阻止決戦を迎える。公良さんは闘いのたびに三支労の小屋に来る千枝子さんと知り合う。成田空港が1本の滑走路で暫定開港した(78

年)翌年二人は結婚した。

三支労は荒川、神奈川かながわ、尼崎あまがさきに活動があり、開港後も三里塚支援を続けた。とくに空港二期工事の矢面にたたさされていた木の根部落の支援に力をいれ、多くの人が木の根を訪れるようにしたいと団結小屋にペンション風の建物を増築することを反対同盟・木の根部落に提案し、受

け入れられた。団結小屋の外周の鉄板の囲いや柵がとりはられ、白壁、赤い屋根、時計台のある交流・集会施設ができた(89年)。これが今の木の根ペンションの前身だ。

木の根部落はシンポジウムでの国側の反対農民に対する謝罪を受け入れる形で、移転に応じることを決める(97年)。木の根ペンションも

取り壊される運命にあったが、公良さんと飯田二郎さんいいたじろう(ともに実験村村民)は残してくれるよう部落に懇請した。「最後まで存続には理解が得られなかった、でも移設については黙認してもらった」。結局、木の根ペンションは約100メートル曳家して、一坪共有地の隣り加瀬勉かせつとむさん名義の土地に残った。

それにしてもひろばグループ(三支労はこう呼ばれることもある)は、最初のペンション設立時に〇百万円(あえて記さない)自弁し、移設の時にも反対同盟と折半して△百万円を用立てている。その集金力には驚嘆する。千枝子さんも「現場からの求めがあれば、みんな給料の中から何パーセントと決めて応じ切る。それは自分たちでもすごいと思う」と語る。木の根ペンションを常宿とする実験村村民は、荒川の方に足を向けては寝られない。

その実験村の現状について「若い人が苦勞している」という見方だ。「われわれも、今しばらく頑張らないとね」とインタビューを終えた。

(平野靖識)

没後一周年特別講座『人間のための経済学 宇沢弘文』 めだか大学で開かれる

成田市 農業 樋ヶ守男

めだか大学は市民の開かれた学問の場です。メンバーは不特定、一回ごとの出入りも自由。ちょっと変っているのは、参加者一人一人が学生であると同時に、ある時は講師になることです。メンバーが自分で研究テーマを決め、「生命あるいは地域にかかわること」なら何でもありです。発表形式も、文書やパソコン映像、DVDや楽器を使ったりする人もいます。講義日程や場所は、本人の希望と皆の都合を話し合っ決めてます。「♪誰が生徒か先生か♪」のめだか状態。参加者の中には大学教員や大学院生もいるのですが、皆めだかの一人。自主的で自由、かつ対等な運営で皆に開かれた学問・研究の場―「大学」です。

性別や職業・年代、生まれ育ちの違う一人一人が先生や生徒になることでもっとも良いところは、それぞれの仕事や生活感覚、いわば人生を通してテーマに迫れることでしょう。だから同じことでも、他の一人一人には新しくて深く、面白さは尽きません。この夏からは、7月―はららの『プロテストソングの系譜』、8月―会津素子さんの『山口県岩国基地視察報告』、9月―ゆうきさんの『成田のけやき小屋、月経について話そう』などの講座が、成田市公津の杜コミュニティホール会議室で開かれました。今後、11月は13日、伊藤文美さんの『香港の二つの農村を訪ねて』が木の根ペンションで、12月は会津素子さんの『大事なことは私たちが決める―住民投票について』がコミュニティホールで予定されています。

10月のめだか大学は、16日金曜夜、公津の杜コミュニティホール会議室。昨秋逝去された宇沢弘文氏没後一周年特別企画『人間のための経済学 宇沢弘文』。参加者は11人でした。最初の1時間は、私の『社会的共通資本から他の生物との協働について考える』。宇沢さんの「自然資本」の中には土壌など自然環境を構成する動植物も含まれていることから、社会的共

通資本をうまく整えてゆくために、人間とそれ以外の生物が共に働くことを基軸におくということを考えてみました。

2限目は、特別講師としてお願いした武蔵大学教員安藤丈将さんの、『宇沢弘文の農本主義：その射程をめぐって』でした。安藤さんは今年2月発行の『現代思想3月臨時増刊号 人間のための経済 宇沢弘文』に「ネオリベの時代に『新農本主義』を求めて」とする文章を載せられていて、その講義をとお願いしました。詳細はご自身の報告にゆずりますが、この号の編集者の方も遠くから駆けつけていただいて、お話を伺えたのも嬉しいことでした。

TPPのように、農業も単にお金を稼ぐ産業の一つとして扱われれば、農業は人間という動物の餌作りにすぎません。食べることが生命の営みそのものであり、食を生み出す仕事人間とすべての生物の生命の営みによってできあがるものとして扱われなければ、農薬や添加物、遺伝子組換え作物のように生命のめぐりを壊したり疎外するものに頼った農業や食品産業になります。食べ物が餌扱いされるということは、人間が家畜扱いされてゆくことです。戦争や格差・貧困の拡大により、人々がどんどん土や自然からひきはがされ、人類の存続そのものがあやぶまれる世界の現在です。「農の営み」や「他の生物との協働」という言葉からの問題提起から、皆が、自分の食や農、生活とのかかわりを話し合いました。ホールの閉館時間に追われましたが、今回も面白い大学になりました。



「宇沢弘文の農本主義：その射程をめぐって」

安藤丈将（武蔵大教員）

宇沢弘文^{うざわひろふみ}は、1989年に「新農本主義を求めて」という論文を書き、この頃から農を軸にした社会の構想を語るようになります。彼の農本主義論のキーワードは、「農の営み」です。宇沢は、農が単なる食料生産だけでなく、仕事のやりがいの喪失や環境破壊といった社会問題を解決する手掛かりになると考えました。このように、「農の営み」は、農作物を生産してお金を稼ぐ以上の意味を与えられていたのです。それは、農が産業になって商品化された後にもなお残る、人びとが延々と紡いできた食べ物をつくるという日常的な実践を指します。宇沢農本主義は、バブル期の日本で都市住民が消費生活を享受する中で書かれ、そこには日本の物質的な豊かさの内実を問いただすという意図がありました。

それから、26年が経ちました。現在では、都市住民の物質的な豊かさという前提が崩れつつあります。日本でも、貧困層の割合は6人に1人、非正規労働者の割合は3人に1人を超えました。食べ物を自らつくり出す能力を持たない都市住民の貧困が問題なのは、それが即、食の貧困につながってしまうからです。今、「農の営み」をもっとも必要としているのは、都市住民かもしれません。一般的に都市と農で思い浮かぶのは、定年退職者の菜園生活かもしれませんが、今後、都市の「農の営み」が、貧しさと背中合わせにある都市住民のサバイバルの方法としての性格を強めると予想されます。

都市住民の生存のための農という観点で見ると、世界各地で、生きるために耕す人びとが増加しています。コックラル＝キング『シティ・ファーマー』（白水社）という本では、都市の超高層ビルのはざままで、土を耕し種を蒔き、収穫する「シティ・ファーマー」の存在が紹介されています。それらの事例は、貧困や多文化共生のような地域問題を解決する方法として農が位置づけられており、単なる食料生産以上の意味が付与されているというのが特徴です。この点で、宇沢農本主義の「農の営み」は、今、世界中の都市にまで拡大中と言えるでしょう。

日本の都市における「農の営み」は、今、新たなステージを迎えています。2015年4月、国会で「都市農業振興基本法」が可決されました。1968年の都市計画法で、市街化区域内農地は、近い将来の消滅を運命づけられていましたが、その位置づけが転換されたのです。新鮮な農産物を生産する場所として、緑地や防災空間として、都市の農地に注目が集まっています。こうした状況で、都市の狭い農地を直売所や市民農園として利用し、そこに新たなビジネスチャンスを見出す人びとも出てきました。その主流化が進む中で、誰のための、何のための都市農業であるかが問われています。都市の農は、どこを目指していけばよいのでしょうか。このことを考える上で、宇沢農本主義の「農の営み」という考え方は、今でも、私たちにとっての大切な導きの糸です。

～村民になってください～

実験村は、いまの社会のありようと、私たち自身のくらしを足元から問い直そうという試みです。国際空港という巨大開発に抗し続けてきた三里塚の地を拠点に、人々と結び合いながら水を、土を、森を、人を大切に作る“もうひとつの里”づくりをめざします。あなたもぜひ、村民になってください。

○村民費 3000円 ○麦大豆畑トラスト 5000円
○通信購読のみ 1000円

郵便振替 00140-3-92555 地球的課題の実験村

<問い合わせ>

電話/FAX: 0476 (26) 1654 平野

メール: jikken-mura@jcom.home.ne.jp

URL: <http://members2.jcom.home.ne.jp/jikken-mura/>

木の根幻野祭2015を振り返って

大森武徳

二年ぶりに木の根ペンションのイベント作りに参加しました。今回はお手伝いです。

イベント名は任されたので名づけました。その名も『木の根^{きののねげんやさい}幻野祭』。

1971年の『日本幻野祭 三里塚』、1990年の『三里塚原野祭』に続いて、このイベントに『木の根幻野祭』と名付けた理由は、かつての『げんやさい』がそうであったように、そもそも三里塚問題を知っている人あまり知らない人、広く言えば社会問題に対して興味ある人あまり無い人や、様々なテーマの社会問題について肯定的な人否定的な人、そういった人々が垣根を越えてこの場所に足を運んでもらうことで、新しい出会いや発見が生まれることに期待を込めて名付けました。

また、ライブイベントを通じて木の根で共に時間を過ごすことで空気と歴史に触れ、目で見て感じて、三里塚の地に今もなお存在する問題と、福島や沖縄や国会前で現在起きている問題に共通する根本的原因に目を向け考えるきっかけになれば、との思いもありました。

結果的には二日間で約150人が参加し、ケガ無く病気無く赤字無く、一応成功という形で無事終了しました。『幻野祭で知り合って友達になった～さん』という声も聞かれ、当初の目的もほぼ達成されたように思います。

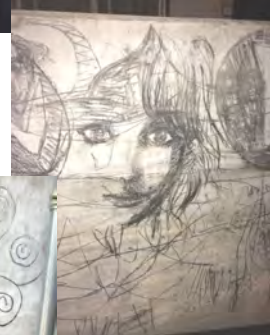
今回は農家仲間やそれぞれの友人達の他、都内ライブハウス、成田参道のライブバー、野外音楽フェスなどを運営する人々や、パイオニア株式会社の関係者も集まっており、ロケーションとこの地の存在価値に大変魅力を感じたようで、必ずまた訪れたいと口々に言っていました。

私自身も来年はまた違った新しい形で木の根の存在と大切さをアピールしていきたいと思っています。

来場者に木の根プールの内壁に描いてもらった『木の根Mural (壁画)』ミニイベントのベストセレクションです。BBQ用の炭や竹炭で描いてもらっているので、雨風で自然に消えていきます。



木の根幻野祭
one earth music
2015/10/11 木の根ペンション
成田市木の根296-1
open16:00start17:00
entrance free
Talk Guest
OneLove 高江
LIVE DJ
3420 ミニレタス Shiori Hanada
Hossy Kentarow
YOS ZukuZuku
HANDCORE and more,,,



劇画風マンボウ
リアルタッチな女性像
水墨画タッチで描かれた鳥獣戯画

北総台地夕立計画

自然の良いところ

ふくだ てんほ(小四)

成田の山に行った。テーブルやブランコが木で作られていた。

まず最初に火をおこした。マッチで火をおこした。2、3回やった。

次に野菜を切った。お昼ごはんのおみそしるを作るために切った。おみそしるは上手にできた。

何もやることがないときは木のブランコで遊んだ。ブランコは高いのと低いのがあった。低いブランコをこいでいたらキノコを見つけた。

木登りもした。高いところも行けた。きやたつを使って木から下りた。

お昼ごはんは、木でできたつくえといすで食べた。家からもってきた、おにぎり自分で作ったたまごやきとその場で作ったおみそしるを食べた。家で食べるごはんより味がちがかった。

ごはんを食べ終わったらまた、ブランコをした。弟といっしょに二人のりをした。低い方のブランコで二人のりした。一人のりもした。高い方にのりした。こいだら、いきおいがつきすぎて木にぶつかりそうになった。

よくみるともぐらがほったあながあった。もっとよく見るとカエルもいた。空の方も見てみると飛行機がたくさんとんでいた。一日に十き以上見た。色々な飛行機があると分かった。

また行きたいと思った。火おこしがおもしろかった。



麦・大豆畑トラスト 金森史明

6月13日に麦刈りを行いました。今年の麦は、生育が良すぎたせいか、5月から6月前半の強風や大雨のせいか、はたまたその両方のせいか倒伏してしまいました。麦は倒伏するとコンバインでの収穫はできませんので、人海戦術での刈り取りを敢行しました。子どももあわせて総勢10名と近年まれにみる大人数での作業でしたが、全体の8分の1くらいをようやく刈れたという進捗でした。その後も数日は金森が刈り取りを行いました。1人では刈りきれぬ量ではありませんでした。そうこうしているうちに雨が降り、倒れて地面についた麦が発芽してしまい収穫できませんでした。

6月13日に刈り取ったぶんについてはなんとか脱穀までこぎつけましたが、今年の麦まきの種用くらいの量しかありません。なので今年麦の収穫物はお届けすることができません。来年、もし今年のように麦が倒れたら緊急招集

をかけて、みなさんをお呼びしますので、ぜひ麦刈りにご参加ください。

大豆に関しては、毎年7月7日前後に種まきをするようしているのですが、今年は7月前半は雨続きで畑作業ができず、すこし遅れての種まきとなりました。去年は除草作業が間に合わず草対応に泣かされたので、その反省を活かして8月に入るまでに2回機械を利用した除草作業と、1回手取り除草を行いました。そのかいあって、草はほとんど出ずに順調な生育をみせていましたが、10月末に一日だけでも寒い朝があり、そのせいか葉っぱがほとんど枯れてしまいました。この影響がどれだけあるのかわかりませんが、途中まで順調だっただけに残念です。

大豆の収穫は12月の5日と6日を予定しています。みなさんのご参加をお待ちしております！

実験村と放射能

山口幸夫（原子力資料情報室・共同代表）

地域の農業と自然を回復したい。それをめざして16年になる実験村周辺にも、東電福島原発事故由来の放射性物質（放射能）が降った。農業にも自然にも大打撃である。

4年半たって、半減期2年のセシウム134は1/4以下になったが、半減期が30年のセシウム137は、ほぼそっくり残っている。半減期が8日のヨウ素131はとうに消えている。2011年9月の航空機モニタリング調査の土壤汚染状況を見ると —あくまでも目安である— 茨城県南部と千葉県北部とが似たような汚染状況だ。成田市、芝山町、酒々井町、富里市、多古町などのほうが千葉県南部より、やや多く汚染している。

実験村の「夕立計画」の森はどれだけ汚染したのだろうか。

1976年いらい、三里塚の無農薬・有機野菜を、野菜はほとんどそれだけを、たべてくらししてきた身からすると、とんでもないことになったわけだ。事故直後は、ヨウ素131が検出されて、ほうれん草など薬物類は出荷されなかった。その後も、三里塚の野菜の生産者は外部に頼んで放射エネルギーを測定して、情報を出してきた。だが去年あたりから、情報が来なくなった。国の基準を大幅に下回ったから、もう大丈夫と判断したのだろうか。

しかし、セシウム137による農産物の汚染の程度がどう推移しているのか、たいへん気になっている。国の基準は甘すぎると思っているからでもある。畑からセシウム137が消えることはないので、耕作者が土ホコリを吸い込んで、内部被ばくするのは避けられない。その畑の土に含まれているセシウム137はキログラムあたり何ベクレルあって、それが作物にどれだけ吸収されているかが問題である。移行率と呼んでいるが、農学・生物学系の研究者の報告はいろいろである。作物にもよるし、それが育つ条件は一律ではない。実験室のようなわけにはゆかない。放射エネルギーの測定も、そう簡単ではない。

測定下限値、あるいは、検出限界値というものがある。測られる野菜などの食品の汚染の程度、測る量、測定にかける時間、測定器の種類や精度などによるので、「放射能は出ませんでした」といわれて、「はい、そうですか」というわけ

にはいかない。

たとえば、2014年秋に野菜と一緒に届いた三里塚の栗だが、「〇〇で放射能測定をしてもらったところ、セシウム134・137はともに不検出でした（検出限界値4ベクレル）」とあった。どういう測定器で、何グラムの栗を、どういう状態で、何時間かけて測ったのか、が書いてない。

そこで、実験村のTさんに頼んで、その栗が取れた同じ場所の栗を1.3キログラムほど集めてもらった。その栗を、①栗全体、②鬼皮部分だけ、③渋皮部分だけ、④実の部分だけ、それぞれ量が異なるが、4種類の測定をした。事前準備にかなりの手間がかかった。肝心の④実の部分は755.4グラムに減ってしまったが、24時間かけて測った結果、セシウム137が3.40～2.08ベクレルが検出された。検出限界は0.92ベクレルだった。測定器はNaIシンチレーション検出器（EMF211）で、スペクトルで示され、コンピュータが分析してくれる。確かに、検出限界4ベクレルなら、不検出である。

わが家には幼児は居ないが、わたしと連れあいはたべなかった。幼児が居たら、もちろんたべさせない。国の基準をクリアしているからといっても、将来のことを国が責任をもってくれるわけではない。そもそも、責任のとりようがない。

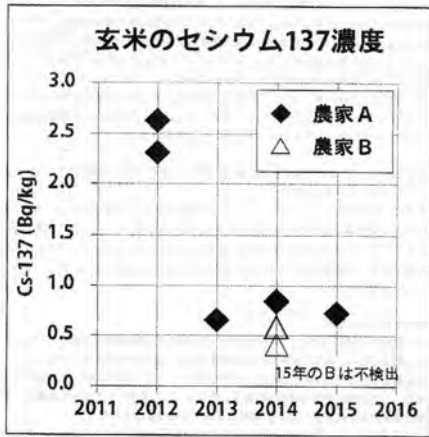
今年の3月～9月に、よそで測定された幾つかのデータを示そう。どれも1キログラムあたりの値で公開されている。

福島県では、阿武隈川のアユ：110ベクレル、伊達市の柿：2.9～3.9ベクレル、梅：2.9～5.3ベクレル、岩手県一関市の牛肉：2.6ベクレル、栃木県の栗：6ベクレル、山梨県鳴沢村のマツタケ：3.2～4.1ベクレル、神奈川県小田原市のバレンシアオレンジ：3.3ベクレルといった値である。阿武隈川のアユ以外は、国の基準値よりずっと少ない。わたしは食べないし、人にもすすめない。

主食の米はどうだろうか。わたしと家族は、野菜と同じく、この40年近く三里塚の低・無農薬米を主食にしてきた。基本的に外食はしない。昼食は玄米のお弁当持参である。1970年代末から「くらしをつくる会」が主宰してき

た「三里塚の米運動」は現在も続いていて、毎年秋に、1年分の玄米を購入する。この運動は青年行動隊が活動資金を得る一つの手段としてやった無農薬・無肥料・放任栽培の米に始まる。この10数年はAさんの合鴨農法の米だ。

あの3・11直後、アメリカのある財団が資金提供を申し出てくれて、性能のよい放射能測定器を原子力資料情報室は備え付けることがで



きた。機種を選定から立ち会ったので、測定器のことはよく承知している。さらに化学の大学院修士課程を終え研究職の経験のある測定者がスタッフとして居る。信用できるデータであろう。結果だけをグラフで示す。Bさんの米は合鴨農法ではない。田んぼはAさんの田んぼとはかなり離れた場所にあるし、水系が異なる。ただし、Bさんは、セシウムの吸収を抑えようとしてカリ肥料を入れている。その効果がどれだけあるかは分らない。諸条件が違うのでAさんの米との差を論じることはできないが、より少ない汚染であることはいえるだろう。

つけくわえると、2.5ベクレルの玄米は精米すると検出限界以下になる。ただし、わが家では、このヌカはたくあんを漬けるのには使わない。困ったことである。

農薬、化学肥料、食品添加物に加えて、食べ物や飲み物の放射能を心配しなければならない時代に入ったわけである。

「農をつなぐ」をテーマに第9回国際有機農業映画祭

「草とり草紙」も上映 12月20日、東京・武蔵大学で

今年で9回目を迎える国際有機農業映画祭は12月20日(日)、東京・練馬の武蔵大学で開催されます。「地球的課題の実験村」は第1回から協賛しており、三里塚の農産物のブースも出しています。

今年の映画祭のテーマは「農をつなぐ」です。高齢化、耕作放棄、グローバル化によるマーケットの縮小と価格の低落といった状況が進む一方で、都市との連携や福祉と結ぶ農業など多様な農業の姿が立ち現われています。農を支えてきた人びとと新しい農の姿を結ぶ映像を中心に6本の映画を上映します。その中には福田克彦さん監督(制作波多野ゆき枝さん)の「草とり草紙」(1985年)があります。今年の映画祭のハイライトです。

戦前、戦中、戦後を生き抜いた一人の女が、畑の草を取り、種をまきながら語る女の一生。染谷のばあちゃんの話はあちこちに飛び、いっそうにまとまらないが、そこに確実に人生があります。死んだ旦那の悪口と土地を黙って空港に売ってしまった息子への怨念、そして一人であらし、畑とらっきょ工場とワンパックで働く今が「一番幸せ」と話す。闘争のことは全く出

てこないが、三里塚のたたかいの底にあるひとの実存が確かにある。若い世代にぜひ見てほしい。映画祭では波多野さんに解説をお願いしています。(大野和興)



- ◆チケット 前売1500円 当日2000円
25歳以下 前売500円 当日1000円
- ◆開始午前10時、午後7時30分終了
- ◆武蔵大学江古田キャンパスのシアター教室
西武池袋線「江古田」「桜台」
都営大江戸線「新江古田」
東京メトロ・副都心線・有楽町線「新桜台」
- ◆申込み 送り先を明示して大野和興まで
FAX: 03-5155-4767
Email: korural@gmail.com

✉ 村民からの手紙 ✉

震災後「いちえふ」の地に入った赤坂憲雄氏が、海が侵蝕し陸が陥没した湿地帯を「入り会い地」にしようとしていた。「復興」の名の下に排水、除塩、除染して、耕やす人はいるのか、と。共感した。

「世界一貧しい大統領」だったウルグアイのムヒカ氏が、日本人は魂を失った、自由＝時間を取り戻すべきとTVで忠告していた。

『児孫のために自由を律す』とは「自由」のイミが正反対だが、論旨は同じ。

8月30日と9月14日に国会前に行った。酸欠になりそうな人ゴミの中で、鎌田慧さんの、成立した後に何もしなかった60年安保の教訓を聞いた。集まった誰もが、これで終わりにはしないと再確認していたと思う。

デモと一緒にいった旧知の女性が、祖父が中島飛行機の防音材で特許を取り、一時、裕福だったらしい、と言うので驚いた。私めは現在、自衛隊の「戦闘機」も作っている富士重工のビルの警備をしているので。

そこは、さいたま市北区の、旧・土呂村と宮原村の入会地で、戦前に中島飛行機の工場が作られた所だ。かつて入会地だった成田市の東峰と同じように、誰の土地でもないからと国に利用されたワケだ。東峰は戦後、開拓で入植した

誰彼の土地になっていたのだが。

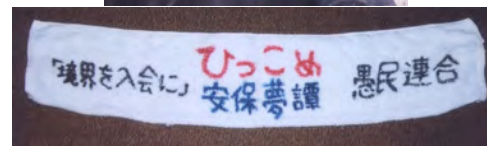
ティモシー・ブルック『セルデンの中国地図』によると、米・亜・アフリカを侵略した西欧の論理も、そこがテラ・ヌリウス（無主地）、誰にも属していない土地だから、最初に「発見」した国のもの、ということらしい。

尖閣、竹島、北方千島等々、歴史を遡ってどちらが先に「発見」したか争っても虚しい。

元祖「積極的平和」提唱者がいうように、共同管理、ないし国連の委任統治にして、利用権は加盟国のクジ引きで決める位がいいのはいいか。入会地にして、自由＝時間を取り戻すべきではないか。

…てなことを考えて、『境界を入会に』愚民連合」僭称する今日この頃です。

(善方拝)



「村民からの手紙」 大募集です。

村民の近況、お知らせ、提案などなど、村民のみなさんからの手紙を募集中です。

現地の企画や行事になかなか参加できない村民のみなさんも、手紙でいろんなことを知らせて下さい。

【手紙の送り先】

〒286-0046 千葉県成田市飯仲297-4
平野 靖識

【編集後記】

今年最後になる「実験村通信」をお届けします。

今年は天候不順で、近ごろ急に寒くなっていますが、麦トラストも今年は収穫ができず、楽しみのうどんは残念ながら来季までお預けです。

次号は恒例の年次寄合いに向けた「通信」になります。またあつと言う間に1年が過ぎますが、再会を楽しみにしています。(K)